

ペンティ・サマラッティ ——人・動物・自然の美しい調和

Yamada Akiko
山田 明子

ペンティ・サマラッティは現代フィンランドを代表する写真家である。風土に育まれた人と社会、そして自然風景を撮影した彼の作品は、母国フィンランドをはじめとする北欧諸国はもとより、フランス、イギリス、アメリカで、そして日本でも紹介され、丁寧に制作された独特の風合いをもつ写真作品は多くの人々を魅了している。

豊かな自然と独特の歴史的な背景をもつ極北の国フィンランドに生まれ育ったサマラッティは、フィンランドの起源を10年がかりで撮影するプロジェクトを1969年に開始した。1974年からヘルシンキ芸術大学などで教鞭をとることになり、若手の育成に力を注ぐようになってからも、自身の撮影プロジェクトを続けてきた。フィンランドは国をあげて芸術家支援に取り組んでいることで知られているが、サマラッティもまた、政府より1991年に15年間の助成金を受けると、撮影とプリント制作に専念するようになった。これまでに彼が撮影をした地は、母国フィンランドをはじめとして、ロシアのカレリア地方や、白海沿岸地域、アイルランド、ハンガリー、フランス、イギリス、そして日本など、数多くの国々におよぶ。

「極北の生まれということもあってか、寒さや暗がり、雨や雪まじりの風が好きだ」と語るサマラッティの写真には、雪と氷の世界と動物がよく登場する。辺り一面雪に覆われた北国の小さな村に置かれたスノーバイクと犬たち、木立にたたずむ白いウサギ、うずくまる牛の背で眠る子犬、大空を舞う鳥など、サマラッティに

よって撮影された写真は、童話の世界のようでもあり、一度見たら眼にやきついて離れない美しく微笑ましい写真が多い。これらの写真には、たいていその風景とともに動物や農夫、古くからある小さな家など、人々の生活を示唆するものが写されている。これらの人や動物は、自然世界の中で居るべき場所をわきまえているかのように、バランス良く収まっており、そこにささやかな幸福さえ感じさせる。

サマラッティの写真に映し出される風景は、どこか懐かしく、そして実に生き生きしている。ただ単に風光明媚な場所を撮影しているのではない。その場所がどこなのか、いつなのかということは、撮影者である彼には問題にならないだろう。時間の大きな流れの中に存在する日常の断片を捉えたこれらの写真には、人々の営みの確かさとも言える光景が映し出されている。彼の作品には、文明社会よりはるその風土に根ざした素朴な暮らしを捉えたものが多いが、自然と調和して生きて来た人々の智慧が、具体的に美しい形となって見えているといえるだろう。「写真家の理想のあり方は、存在感がないことだと思う」と語る彼は、広い視野と広い心で自分の眼に映るものをそのまま受け止めている。「現実をどうこうするのではなく、犬のごとき臭覚と鷹のごとき視覚をもって、観察のみに徹する」のだという。時には数ヶ月間に渡りその地に滞在して撮影するのがサマラッティ流の撮影である。「旅する写真家」という呼び方はふさわしくない。むしろ、旅ではなく、何処に行こうとサマラッティ自身はかわることなく、その地に身を置いて、眼に映るものをありのまま



photograph copyright © Pentti Sammallahti

に受け止めているのである。



サマラッティの作品の特徴は、モノクロームプリントの美しさにある。映っているものや情景にふさわしい色調になるよう、1点1点印画紙を変えて丁寧にプリントしている。それは、自身の写真をどのように伝えるか、作り上げていくかということに対する彼のこだわりでもある。もうひとつの特徴は、印刷と本作りである。1970年代から本作りに取り組んで来た彼は、写真にもっともふさわしい印刷技術を選び、ふさわしいサイズに印刷する。これらの1点1点の写真は、オリジナルプリントに匹敵するほどの美しさを持ち合わせ、バランス良く本の中に収まっているのである。



サマラッティが1979年から製作に着手した“Opus”と題する出版物のシリーズは、写真集の形態をとったり、ポートフォリオの形態であったり、作者やテーマによって自由に製作されている。この“Opus” 41号に、自身の作品を収録した『Archipelago』（2004年出版）がある。グラフィックデザイン、カバー製本デザイン、製版、全てをサマラッティ本人が行っている。

写真にふさわしい紙質とサイズを選び、写真を見せるのにふさわしい製本を行い、丁寧に印刷された本作りである。現代フィンランドのシンプルなブックデザインの美しさが溢れている。ここにも彼のこだわりと心配りが見て取れるだろう。

写真について、あまり多くを語ることはないサマラッティだが、そんな彼が次のように語っているのだから、ここに書き添えておきたい。「写真家に与えられた仕事として一番大切なことは、創造することや想像することではなく、物事を見たい思う気持ちと、見たものを大切にありのままを伝えることなのだと思う。」

ペンティ・サマラッティ

1950年フィンランド、ヘルシンキに生まれる。

自然風景を背景に、人や動物が共に生きる日常の一コマを捉えた写真で知られる。日本では2003年に始めて個展が開催され、作品が紹介された。

作品は、ニューヨーク近代美術館、ビクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム(ロンドン)、フランス国立図書館(パリ)、プーシキン美術館(モスクワ)などに収蔵されている。

『Pentti Sammallahti』

2002年 Nazraeli Press社

ハードカバー